

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2005～2008

課題番号：17330149

研究課題名 (和文) 子どもの面接法-出来事を話すための語彙-

研究課題名 (英文) Investigative interview with children: Vocabulary for talking about an event

研究代表者

仲 真紀子 (NAKA MAKIKO)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：00172255

**研究成果の概要：**子どもが司法場面で情報提供を求められることは少なくない。本研究の目的は、出来事の報告、特に人物の記述と、刑事事件でも民事事件でも問題になる感情・気持ちの表現に焦点を当て、発達の变化を明らかにするとともに、得られた資料を司法面接の開発に活かすことであった。成果は以下の3点となる。(1) 実験研究により、語彙は限られているものの、幼児による人物記述の度合いは人物の再認の正確さと関わっていること、感情・気持ちについては、特にネガティブな気持ちを表す語彙が学童期に増加することを示した。(2) 幼児の供述の信用性に関する大人の意識、認識を検討し、一般市民は子どもの供述の信用性を高く見積もりがちであることを示した。(3) これらの成果、文献調査、国外での調査などを踏まえ、面接ガイドラインを提案した。

## 交付額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費      | 合計        |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 2005年度 | 3,100,000 | 0         | 3,100,000 |
| 2006年度 | 1,800,000 | 0         | 1,800,000 |
| 2007年度 | 1,900,000 | 570,000   | 2,470,000 |
| 2008年度 | 1,600,000 | 480,000   | 2,080,000 |
| 年度     |           |           |           |
| 総計     | 8,400,000 | 1,050,000 | 9,450,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・実験心理学

キーワード：出来事の報告、司法面接、語彙、人物記述、感情・気持ちの表現、知識と期待、子どもの保護、面接ガイドライン

## 1. 研究開始当初の背景

出来事の記憶の発達には、母子対話や目撃証言の文脈で研究が進められてきた。そのなかで、幼児の報告は母親の支援に依存すること、質問や暗示の影響を受けることなどが明らかにされている (Nelson, Fivush, McCabe,

Ceci 等)。しかし、幼児自身が出来事を報告するための語彙をどの程度もっているかを調べた研究は少なく、Aldridge & Wood (1998) がある程度である。我が国でも、保育士による生活発表の援助 (藤崎)、ビデオ内容に関する母子対話 (高橋)、質問に対する出来事

の想起（中澤，Uehara，Moriら，菊野，仲）など，対話や質問を重視した研究はあるが，出来事を表す語彙に注目した研究は少ない。

語彙獲得の研究は，語彙一般(国研)，名詞(今井，針生)，動詞(小林)，助詞(横山)，代名詞(斎藤)，育児語(小椋)，助数詞(仲)など多岐にわたるが，出来事の報告と関わるのは，岩淵・村石(1976)による時間を表す語彙(明日，昨日等)の調査があるくらいである。

こういった状況は，出来事の正確な報告を求める「司法面接」が比較的新しい研究領域であることにもよるのだろう。本研究は国内外で不足している情報を提供し，司法面接の確立に貢献することを目指している。

## 2. 研究の目的

期間内に以下の3点を達成することを目標として定めた。

- (1)実験的研究と事例研究を通して，出来事を語る語彙，特に人物の記述と感情，気持ちを表す語彙，表現の発達を調べること。
  - (2)調査研究を通して，子どもの供述の信用性に関する一般市民の意識を調べること。
  - (3)国内外における司法面接の実施状況を調べ，(1)(2)の成果とも合わせて予備的なガイドラインを作成すること。
- このために，①実験研究，②調査研究，③文献研究・国外視察を行う。

## 3. 研究の方法と4. 研究成果

本研究の方法①実験研究，②調査研究，③文献研究・国外視察は上記の(1)(2)(3)と対応しており，方法論と成果が結びついている。そこで，ここでは3「研究の方法」と4「研究成果」を合わせて報告する。

### (1) 実験研究：人物を表す語彙と気持ち，感情を表す語彙

#### 方法

**材料：** Idridge & Wood (1998)にならい，軍手人形による人形劇を10作成した。出来事は，先生の眼鏡がなくなる，ヨッチャンが木に登り，降りられなくなる，ミイちゃんがタッ君に髪を引っ張られ，無理矢理遊びに誘われる等である(人形は「眼鏡がない」「降りられない」などの活動に関する言葉は発するが，感情語は用いない)。ポジティブな出来事が含まれる小劇は3，ネガティブな出来事が含まれる小劇は7であり，長さはそれぞれ30秒から1分程度であった。

**参加者：**2005-2006年度は主に幼児を対象とした(120名)。2007年度は小学生(86人)，2008年度は施設入所児(17人，現在も資料収集中)を対象とした。

**手続き：**人形劇をDVDで提示し，各出来事について，①他者の感情の説明(登場人物はどのような気持ちだったか)，②自己の感情

の説明(〇〇ちゃん=対象児は登場人物のことをどう思うか)を求める。幼児には語彙テスト，情報源課題の認識課題，心の理論課題等も実施した。また，調査を行った実験者(人物)に関する記述を求めた。

いずれも個人情報の扱いに注意し，倫理的配慮を行い，保育士，教員，施設長の許可指導のもとに研究を実施した。

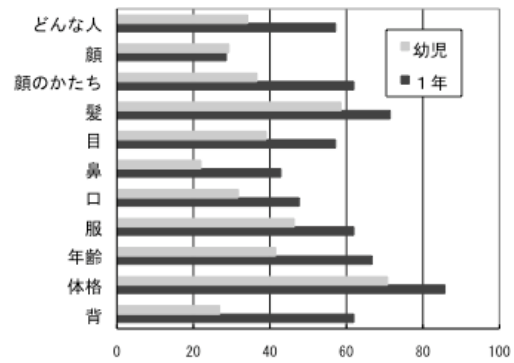
## 成果

データは現在も収集中，分析中であるが，ここまでで整理した成果について報告する。

### ① 人物を表す語彙

幼児と小学校1年生が，人物の記述において言及した部位を図1に示す。体格や髪型，顔のかたちについてはある程度の情報提供が可能であるが，顔の内部，特に鼻についての記述は少ない。

なお，正しく同定できた子どもとそうでない子どもとで記述量を比較したところ，正しく人物同定を行った幼児・児童の方が，そうでない子どもよりも，顔の記述数が多かった。



また，同一の人物に対し27人の子どもの行った記述を表1に示す(数値は記述者数)。ばらつきが大きいことがわかる。

表1：同一人物に対する記述

| 顔の形  | 髪       | 目         | 鼻        | 口      |
|------|---------|-----------|----------|--------|
| こう3  | こう2     | キラキラしていた1 | こう3      | 唇ついてた1 |
| 丸2   | しばってた2  | こう3       | 普通1      | こう3    |
| 丸々1  | 長い9     | 普通5       | 三角1      | 普通1    |
| 卵みた2 | 短い2     | 丸い2       | 実験者と同じ1  | 細い1    |
| 四角1  | 長さ3     | 大きい2      | ついてなかった1 | にこって1  |
| 細長い1 | 黒3      | 赤い眼鏡1     |          |        |
|      | 上べちゃんこ1 |           |          |        |

### ② 感情を表す語彙

幼児，児童が用いた感情語の異なり語数を図に示す。また，用いられた語彙を表に示す。

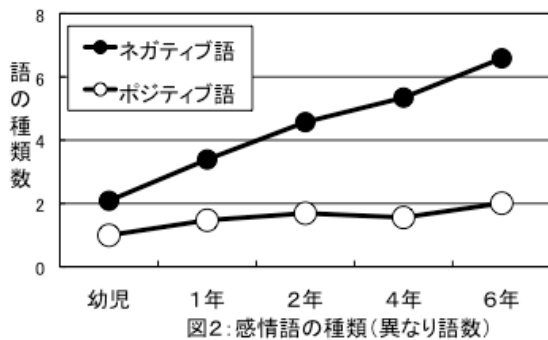


表2:感情語の内容(数値は使用した人数%)

|       | 幼児 | 1年 | 2年 | 4年 | 6年 | 計  |
|-------|----|----|----|----|----|----|
| 嫌だ    | 43 | 80 | 57 | 61 | 61 | 66 |
| 痛い    | 24 | 52 | 76 | 72 | 38 | 53 |
| 困った   | 14 | 28 | 76 | 72 | 61 | 48 |
| 怖い    | 21 | 33 | 50 | 66 | 52 | 44 |
| 悲しい   | 26 | 33 | 46 | 33 | 57 | 40 |
| 怒る    | 12 | 19 | 19 | 22 | 57 | 29 |
| びっくり  | 4  | 14 | 23 | 27 | 4  | 14 |
| 心配    | 0  | 0  | 15 | 16 | 19 | 9  |
| 無理矢理  | 0  | 0  | 0  | 11 | 23 | 7  |
| しつこい  | 0  | 4  | 7  | 11 | 4  | 4  |
| 後悔    | 0  | 0  | 0  | 5  | 19 | 3  |
| 不安    | 0  | 0  | 0  | 5  | 9  | 3  |
| 焦る    | 0  | 0  | 0  | 16 | 4  | 3  |
| 悔しい   | 0  | 4  | 0  | 0  | 4  | 1  |
| かわいそう | 12 | 28 | 15 | 0  | 0  | 12 |
| 嬉しい   | 56 | 76 | 69 | 33 | 52 | 66 |
| 良かった  | 24 | 57 | 76 | 66 | 52 | 53 |
| ほっとした | 0  | 4  | 7  | 22 | 19 | 8  |
| いい気持ち | 0  | 14 | 0  | 0  | 0  | 3  |
| 優しい   | 0  | 0  | 0  | 0  | 4  | 1  |

これらの結果に加え、自分の感情、気持ちについて報告する場合と、他者の感情、気持ちについて報告する場合とでは、前者の方が困難であることが見いだされた。

## (2) 子どもの証言の信用性に関する意識

二つの調査研究を行った。

第一は、子どもの供述の信用性、および記憶の抑圧・回復に関する評定である。後者は「外傷的体験は抑圧され、やがて回復する」という主張に対する判断である。面接者がこの主張に対しどのような考えを抱いているかは、長時間後に「回復した」とされる供述の信用性の判断に影響を及ぼす。本調査は、南山大学の岡田悦典氏、政策研究大学院大学の藤田政博氏との共同研究で実施した。回答者は一般市民294人、大学生90人であった。

その結果「幼児の証人は、成人の証人に比べ、正確さの度合いが低い」を正しいとする

人は9%、「外傷的な体験は、何年も抑圧され、それから回復されることがある」を正しいとする人は68%であった。Kassinらの先行研究によれば、法と心理学の専門家で上記の項目を正しいとする人は、それぞれ65%、16%である。市民は反対方向の判断を行っていることになる。

第二に、記憶の抑圧・回復に関する評定、および日常の記憶体験に関する調査を大学生110人に対して行った。

その結果、上記の調査と同様、記憶の抑圧と回復に対する信念は高いこと、その信念は、日常的な記憶の忘却・想起体験と関わっていることが示された。

## (3) 文献研究ならびに国外の視察調査

語彙や認知の発達に応じた面接法の開発を目指し、文献研究、国外視察を行った。

文献研究では、幼児、児童の証言の正確性に関わる要因について検討した。国内外の研究を概観することにより、語彙の問題に加え、情報源の理解、現実と空想の区別、嘘と真実の区別、誘導の影響等が供述の正確さに影響を及ぼすこと、比較的安定した供述を得られるようになるのは、個人差もあるが概ね6歳以降であることが示された。この年代になると大人の質問に頼る度合いが減り、自発的な報告が可能となる。よって、自由報告、オープン質問を主とする面接が行われれば、比較的正确な情報が得られやすい。

国外の調査としては、2005年度、英国レスターにおける司法面接室を訪問し資料を収集した。また、2007年、英国ロンドンならびにケンブリッジにおいて司法面接(Memorandum of Good Practice: MOGP)およびAchieving Best Evidence: ABE)に関する資料収集を行った。加えて、2007年、ロンドン警察において2週間にわたる司法面接研修に参加し、司法面接のガイドラインとトレーニングに関する情報を得た。

## (4) 成果のまとめとガイドライン

実験、調査、文献研究・国外視察により得られた情報にもとづき、ガイドラインを提案した。研究開始当時は、(面接者が用いる)語彙に制約をつけた上で面接を行う面接法の提案を考えていた。しかし、語彙が少なくても報告できる量は記憶の正確性と関わっている(人物記述の結果より)。また、語彙には個人差、課題差があり、例えば自分の気持ちは他者の気持ちよりも説明しにくい。このようなことから、使用する語彙に画一的な制約をつけるよりも、面接導入時に面接者が子どもの語彙レベルを査定すること、子どもに面接の目的を伝え「知らない」「わからない」と言ってよいと教示することなどが重要であると考えられるようになった。このような考

察にもとづき、MOGP、ABE を踏まえ、以下のようなガイドラインを提案した。

**導入と約束：**語彙が限られている幼児においては、特に、面接の目的を明らかにし、わからないことはわからない、知らないことは知らないと言ってよいことを明示する。また、面接はビデオ録画する。

- 日付、氏名を記録する。
- ビデオをとることを説明する。
  - あなたのお話を忘れないように。
  - あなたが何度も話さなくてよいように。
- 以下の約束をする。
  - 質問がわからない時はわからないと言う。
  - 覚えていなければ覚えていないと言う。
  - 誰かから聞いたことや、考えたことではなく、本当にあったことを言う。
  - 私（面接者）はそこにいなかったの、どんなことがあったのかわからない。どんなことでも、あったことを話す。

**第1段階・ラポール：**中立な出来事について尋ね、いつ、どこで、誰が、何を、どうした等についての語彙や言語レベルを確認する。

**第2段階・自由報告：**「今日は何をお話しに来たのかな？」等の誘いかけにより自由報告を求める。

**第3段階・質問：**自由報告で述べられなかったことについて質問する。

- **A 段階：**より詳しい情報をオープン質問により求める。「さっき〇〇って言ってたけれどももう少し詳しくお話しして」
- **B 段階：**得られなかった情報について WH 質問「いつ、どこ、誰等」を行う。
- **C 段階：**争点ではないことについてクローズド質問を行う。「それは、ゴールデンウィークよりも前？後？」。不明な語彙については描画などで確認する。
- **D 段階：**やむを得ない場合は誘導質問（争点となり得ることについてのクローズド質問：「叩かれたの？」等）を行う。証拠的価値が下がるので、極力避ける。

**第4段階・クロージング：**得られた情報を子どもの言葉で（言い換えることなく）確認し、中立の話題に戻し、感謝して終了する。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

本課題の成果が部分的に活かされている業績も列記する。

### 〔雑誌論文〕（計 17 件）

- ①山崎優子，仲真紀子，「未必の故意」に関する教示が司法修習生と大学生の裁判理解および法的判断に及ぼす影響，法と心理，7，70-72，2008，有
- ②加地雄一，仲真紀子，花田安弘，被験者実

演課題における年齢効果と系列位置曲線，日本教育工学会論文誌，32(suppl)，181-184，2008，査読有

③加地雄一，仲真紀子，手話の記憶における実演効果，認知心理学研究，6，21-33，2008，査読有

④仲真紀子，杉浦ひとみ，廣井亮一，白取裕司，西田美樹，西尾洋介，少年事件における少年へのインタビュー，法と心理，7，70-72，2008，査読無

⑤仲真紀子，児童虐待における子どもとの面接 ～出来事を話す～，そだちと臨床，5，147-150，2008，査読無

⑥丹藤克也，仲真紀子，検索誘導性忘却の持続性，心理学研究，78，310-315，2007，査読有

⑦Rubin, D. C., Schrauf, R. W., Gulgoz, S., Naka, M., Cross-cultural variability of component processes in autobiographical remembering: Japan, Turkey, and the United States, Memory, 15, 536-547, 2007, 査読有

⑧石崎千景，仲真紀子，有富美代子，文脈情報の想起および言語化が顔の記憶の正確さと確信度の関係に及ぼす影響，心理学研究，78，63-69，2007，査読有

⑨岡田悦典，仲真紀子，藤田政博，裁判員の刑事裁判への参加意識と法に関する認識(2)-予備的アンケート調査から-，南山法学，30，89-112，2006，査読無

⑩岡田悦典，仲真紀子，藤田政博，裁判員の刑事裁判への参加意識と法に関する認識(1)-予備的アンケート調査から-，南山法学，29，38-76，2006，査読無

⑪加地雄一，仲真紀子，行為を実演した記憶と想像した記憶の違い-ソース・モニタリング課題による検討-，基礎心理学研究，24，162-170，2006，査読有

⑫白石紘章，仲真紀子，海老原直邦，認知面接と修正版認知面接における出来事の再生と反復提示された誘導情報の情報源再認，認知心理学研究，4，33-42，2006，査読有

⑬ Naka, M.，Maki, Y.，Belief and Experience of Memory Recovery, Applied Cognitive Psychology, 20, 649-659, 2006, 査読有

⑭Jin, Jing Ai, Naka, M., Mother-child conversation about past events: Mothers' support and children's elaboration, SIG-SLUD, A602-04(11/16), 19-24, 2006, 査読有

⑮仲真紀子，目撃証言における顔：顔をどのように伝達するか，科学，75，1298-1302，2005，査読無

⑯仲真紀子，村井敏邦，一瀬敬一郎，誤起訴・誤判の原因に関する意識調査：弁護士と学生，および個別の事例にもとづく判断と一般的

判断の比較, 龍谷大学社会科学叢書, 61, 61-103, 2005, 査読無

⑰仲真紀子, 上宮愛, 子どもの証言能力と証言を支える要因, 心理学評論, 48, 343-361, 2005, 査読有

〔学会発表〕(計 31 件)

① Naka, M., Japanese studies on the validity of child's testimony. 2009 Special Symposium of Assessment of alleged child victim: Finding the truth and protecting the child. 2009年1月21日, Seoul National University, Seoul, Korea

②波多野新吾, 仲真紀子, 小学・中学・高校・大学時代に期待されるリスク認知の特徴, 北海道心理学会, 2008年11月23日, 北星学園大学, 札幌

③福井郁恵, 仲真紀子, 司法面接法の訓練と効果: 専門性, および被面接者の性格特性に関する分析, 北海道心理学会, 2008年11月23日, 北星学園大学, 札幌

④ Naka, M., Effects of victim impact statement on lay people's judicial decision, Psychonomic Society, 2008年11月14日, Hilton Hotel, Chicago, U.S.

⑤仲真紀子, 法律相談, カウンセリング, 司法面接における面接法トレーニング. 事実焦点を当てた, 子どもへの司法面接, 法と心理学会, 2008年10月18日, 南山大学, 名古屋

⑥上宮愛, 仲真紀子, 松田瑛美, 小山和利, 被虐待児による嘘と真実の理解-虐待経験のある子どもたちの証言能力の査定について-, 法と心理学会, 2008年10月14日, 南山大学, 名古屋

⑦上宮愛, 仲真紀子, 嘘・真実についての概念理解の発達 2-幼児・児童・中学生・大学生による嘘の定義-, 日本心理学会, 2008年9月19日, 北海道大学, 札幌

⑧三輪智子, 仲真紀子, 子どもによる感情的な出来事の語り — どのようなトピックについて語るのか —, 日本心理学会, 2008年9月19日, 北海道大学, 札幌

⑨仲真紀子, 上宮愛, 小山和利, 一般および虐待を受けたとされる幼児, 児童による感情語の使用-他者の感情の説明-, 日本心理学会, 2008年9月19日, 北海道大学, 札幌

⑩三輪智子, 仲真紀子, 幼児による出来事の語り-日常のルーチン, ポジティブな出来事, ネガティブな出来事, 日本発達心理学会, 2008年3月19日, 大阪国際会議場, 大阪

⑪仲真紀子, 幼児の安全教育 III: 幼児の暮らしの安全・安心をもたらすコミュニケーション力の発達, 日本発達心理学会, 2008年3月19日, 大阪国際会議場, 大阪

⑫仲真紀子, 子どもへのインタビュー, 観察をめぐる問題: 家庭裁判所調査官の仕事と発

達研究の視点, 法と心理学会, 2007年10月14日, 北海道大学, 札幌

⑬仲真紀子, 出来事を語るための語彙: 幼児による人物記述 - 記述項目数と顔の記述内容, 日本心理学会, 2007年9月20日, 東洋大学, 東京

⑭三輪智子, 仲真紀子, 子どもによる感情的な出来事の語り - 日常のルーチン, ポジティブな出来事, ネガティブな出来事 -, 日本心理学会, 2007年9月19日, 東洋大学, 東京

⑮仲真紀子, 心と発話・動作の間: 質的データの検討, 日本心理学会, 2007年9月19日, 東洋大学, 東京

⑯仲真紀子, 自伝的記憶の理論と方法(5), 日本心理学会, 2007年9月18日, 東洋大学, 東京

⑰上宮愛, 仲真紀子, 小学生による嘘の判断, 日本心理学会, 2007年9月18日, 東洋大学, 東京

⑱ Miwa, T., Naka, M., Children's description of their experiences: What do they remember about emotionally negative and positive events?, Society for Applied Research in Memory and Cognition, 2007年7月28日, Bates College, Maine, U.S.

⑲ Uemiya, A., Naka, M., Perception of lies: How do junior high school students and their parents identify lies?, Society for Applied Research in Memory and Cognition, 2007年7月28日, Bates College, Maine, U.S.

⑳ Naka, M., Children's description of other's feelings and their own feelings, Society for Applied Research in Memory and Cognition, 2007年7月26日, Bates College, Maine, U.S.

㉑仲真紀子, 記憶の抑圧と回復に関する信念, 日本心理学会, 2006年11月3日, 九州大学, 福岡

㉒上宮愛, 仲真紀子, 中学生とその保護者による嘘の認識, 日本心理学会, 2006年11月3日, 九州大学, 福岡

㉓親家泉, サトウタツヤ, 仲真紀子, 認知インタビューによる想起促進-刺激内用を知らない面接者を用いた効果の検討-, 法と心理学会, 2006年10月14日, 法政大学, 東京

㉔上宮愛, 仲真紀子, 幼児の証言能力の査定-嘘・真実についての概念理解と嘘をつく行為との関連-, 法と心理学会, 2006年10月14日, 法政大学, 東京

㉕仲真紀子, 西田美樹, 杉浦ひとみ, 少年事件における少年へのインタビュー, 法と心理学会, 2006年10月14日, 法政大学, 東京

㉖ Naka, M., Okada, Y., Fujita, M., Yamasaki, Y., Psychological knowledge and legal knowledge I: Belief in eyewitness testimony and legal knowledge in



prospective lay judges, International Conference on Memory, 2006年7月21日, University of South Wales, Sydney, Australia

⑲Uemiya, A., Naka, M., Infants' knowledge on truth and lie: What they know and how it relates to the behaviour of telling a lie, International Conference on Memory, 2006年7月21日, University of South Wales, Sydney, Australia

⑳Miwa, T., Naka, M., Young children's description of a person: a person they saw and another in front of them, International Conference on Memory, 2006年7月21日, University of South Wales, Sydney, Australia

㉑上宮愛, 仲真紀子, 幼児による嘘の概念的理解と嘘をつく行為, 日本心理学会, 2005年9月10日, 慶応義塾大学, 東京

㉒仲真紀子, 浅井千絵, 主尋問と反対尋問の理解I-反対尋問は簡単にできるか?, 日本心理学会, 2005年9月10日, 慶応義塾大学, 東京

㉓白石紘章, 海老原直邦, 仲真紀子, 2種類の認知インタビューにおける誤った事後情報の反復提示がソースの想起に及ぼす影響-2種類のインタビュー法の再生成績の比較を含めて-, 日本心理学会, 2005年9月10日, 慶応義塾大学, 東京

#### 【図書】(計14件)

①仲真紀子, 北大路書房, 子どもの語りと感情表現. 佐藤浩一(編著)自伝的記憶の心理学, 2008, 200-215

②仲真紀子, 北大路書房, 談話の産出・理解におけるメタ認知. 三宮真智子(編著)メタ認知: 学習力を支える高次認知機能, 2008, 151-168

③仲真紀子, 金子書房, (編著)自己心理学: 認知心理学へのアプローチ, 2008, 249

④西川泰夫, 阿部純一, 仲真紀子(編著), 日本放送出版協会, 認知科学の展開, 2008, 160-185, 222-237

⑤仲真紀子, ミネルヴァ書房, 記憶し想起する心の発達. 内田伸子(編)よくわかる乳幼児心理学, 2007, 114-124

⑥高橋恵子, 河合優年, 仲真紀子, 日本放送出版協会, (編著)感情の心理学, 2007, 71-98

⑦仲真紀子, 日本放送出版協会, 情報を分かち合う-出来事の報告と目撃証言, 内田伸子・氏家達夫(編著)発達心理学特論, 2007, 81-93

⑧仲真紀子, 日本放送出版協会, 思い出はどこから-出来事の記憶と想起-, 内田伸子・氏家達夫(編著)発達心理学特論, 2007, 53-66

⑨仲真紀子, 金子書房, 供述という会話の特質-予兆を見逃さない事情聴取, 内田伸子・

坂元章(編著)リスク社会を生き抜くコミュニケーション力, 2007, 149-169

⑩仲真紀子, 有斐閣, 他者と情報を分かち合う: コミュニケーションの機能と発達, 内田伸子(編)発達心理学キーワード, 2006, 121-144

⑪Naka, M., Cambridge University Press, Memory talk and testimony in children. In R. Mazuka et al (Eds.) Handbook of East Asian Psycholinguistics, 2006, 123-129

⑫仲真紀子, 誠信書房, (編著)認知心理学の新しいかたち, 2005, 344

⑬仲真紀子, 現代人文社, 子どもの目撃供述とその面接法. 法と心理学会ガイドライン作成委員会(編). 目撃供述, 識別手続に関するガイドライン 2005, 219-233

⑭仲真紀子, 現代人文社, 目撃者の心理特性を考慮しなければならない場合. 法と心理学会ガイドライン作成委員会(編). 目撃供述, 識別手続に関するガイドライン, 2005, 149-152

#### 【その他】

①仲真紀子, 子どもを元気にする応答, レッツ聞き上手お母さん⑥, ファミリス 11月号, 2008, 22-23

②仲真紀子, 自由報告を大切に司法面接, レッツ聞き上手お母さん⑤, ファミリス 10月号, 2008, 22-23

③仲真紀子, 質問でプレッシャーかけてませんか?, レッツ聞き上手お母さん④, ファミリス 9月号, 2008, 22-23

④仲真紀子, 「わかりやすい報告」できてますか?, レッツ聞き上手お母さん③, ファミリス 8月号, 2008, 22-23

⑤仲真紀子, たくさん話せるオープン質問, レッツ聞き上手お母さん②, ファミリス 7月号, 2008, 22-23

⑥仲真紀子, 聞いてあげる, 答えてあげる, レッツ聞き上手お母さん①, ファミリス 5, 6月号, 2008, 22-23

⑦英国内務省, 英国保健省(著), 仲真紀子, 田中周子(訳), 誠信書房, 子どもの司法面接-ビデオ録画面接のためのガイドライン, 2007, 142

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

仲 真紀子 (NAKA MAKIKO)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 00172255

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし